

小説フレームアームズ・ガール

後日談「ただ大切な物の為に・後編」

1. 死闘

「あれは・・・！！」

ナナミと共にカズマとホタルの迎撃に向かったシオンが、カズマがビームキャノンを構えている姿を見て厳しい表情を見せる。

今まさに、ビームキャノンから大出力のエネルギー波が放たれようとしていたのだが。

「砲撃型か！！」

「撃たせはしない！！」

シオンと追従していたナナミがフレズヴェルク・ダガーをストライダー形態に変形させ、高速でカズマに接近しつつ、機首からマナ・ビームマシンガンのカズマに浴びせた。

それを巧みに避けつつ、カズマはビームキャノンをナナミに発射。

だがナナミはストライダー形態の高速機動を駆使し、次々と放たれるビームキャノンを巧みに避け続ける。

「機動性に関しては、あの新型の方がマガツキよりも上か・・・！！だが、しかし！！」

「はあああああああああああああああああっ！！」

再びフレズヴェルク・ダガーをフレームアーム形態に変形させたナナミが、マナ・ビームサーベルでカズマに斬りかかった。

上空で何度もぶつかり合う2人のビームサーベル。2人の周囲に無数の糸状の閃光が走る。

「シオン・アルザード！！お前の相手はこの私だあっ！！」

「こっちは近接戦闘特化タイプか！！」

そしてビームサーベルの二刀流でシオンに襲い掛かるホタル。

それをマナ・ハイパービームサーベルとマナ・ハイパービームシールドで巧みに受け止め続けるシオンだったが、ホタルの剣術と猛攻の前に完全に押されていた。

「行け！！フェザーファンネル！！」

何とかホタルから間合いを離れたシオンは、背中の中翼から12基ものフェザーファンネルを一斉に分離し、全方位オールレンジ攻撃を仕掛けるが、それをホタルは驚異的な反射神経でもって避けまくり、シオンに斬りかかる。

「それがどうした！？」

「さすがに手強い・・・！！だが、それでも！！」

シオンとナナミがカズマとホタルを相手に死闘を繰り返している最中、コーネリア共和国の城下町付近では、コーネリア共和国軍とジャパネス王国軍による死闘が繰り返されていた。

ジャパネス王国軍の地上部隊に襲い掛かった。

完全に虚を突かれたジャパネス王国軍の地上部隊が一斉にビームマシンガンを放つも、上空を高速で動き回るペガサスライダー部隊を捉えられない。

戦況は完全に、コーネリア共和国軍が優勢・・・だがそれでも旗艦アマテラスから指示を出すコウゾウは余裕の態度を崩さなかった。

「奴らめ、スティレット・ダガーが使えないというのに中々やるではないか。精霊魔法というのは本当に厄介な物よ。10年戦争において、あのグランザム帝国軍でさえも惨敗を喫しただけの事はあるようだ。」

「天皇大將軍様、我が軍の損害率が10%を超えました！！このままでは！！」

「慌てるな！！奴らの快進撃もここまでだ！！このまま例の作戦を実行する！！正門を攻略中の部隊を退避させろ！！」

「了解！！」

コーネリア共和国軍の旗艦バハムートが他の巡洋艦を従えて上空に陣取り、無数の砲台から放たれるビームやミサイルで味方部隊を援護する。

オペレーターのスティレットたちを通じてエミリアの指示が兵士たちに飛び、エミリアの巧みな戦術によってジャパネス王国軍が次々と蹴散らされていく。

そんな最中、正門を攻略中の部隊がコウゾウの命令で、突如撤退を開始。

だが次の瞬間、ジャパネス王国軍の巡洋艦が一隻、無数の砲台から一斉にビームを放ちながら、突然正門に向けて特攻を始めたのだった。

「敵高速巡洋艦ハルカゼ、周囲に巨大アンチビームフィールドを展開しながら、真っすぐに正門に向かって突撃して来ます！！」

特攻か・・・！？スティレットの言葉に、他のオペレーターたちが厳しい表情を見せる。

パワードスーツを身に纏った兵士たちが上空から一斉にビームマシンガンやビームキャノンを探洋艦に放つが、アンチビームフィールドに阻まれて全く効き目が無い。

彼らの必死の抵抗も空しく、巡洋艦が物凄い勢いで正門へと突撃していく。

その様子をカズマと戦いながら、ナナミが歯軋りしながら見つめていたのだった。

「まさかエミリア様の推測通り、本当にハルカゼによる特攻を・・・！！」

「行かせんぞ、キサラギ少尉！！」

「くっ・・・！！」

カズマのビームキャノンから放たれる砲撃を、ナナミはプレズヴェルク・ダガーをストライダー形態に変形させ、巧みに避け続ける。

味方部隊の掩護に回ろうにも、カズマの巧みな砲撃の前に完全に足止めされてしまっていた。

そしてシオンもまたホタルに足止めされてしまっており、味方の援護に向かう事が出来ない。

だがそれでも尚、シオンもナナミも全く慌ててはいなかった。

コーネリア共和国軍の旗艦・バハムートには、こういう事態を想定して開発されたばかりの、とっておきの切り札が搭載されているのだ。

「ステラ。ソルカノンで特攻する敵巡洋艦を破壊して下さい。」

「イエス・マム！！」

エミリアの言葉と同時にスティレットが端末を操作。バハムートの機首が展開し、巨大な砲台が姿

を現した。

コーネリア共和国軍が開発した最新鋭の戦略兵器・・・大型砲塔ソルカノンだ。

「ソルカノン、セーフティーアンロック！！攻撃範囲内に味方部隊が巻き込まれない事を確認しました！！エネルギーチャージ・フル(100)%、全システムオールグリーン！！敵高速巡洋艦ハルカゼ、ロックオン！！」

バハムートの機首に搭載されたソルカノンに、青色の粒子が収束する。

そして物凄い勢いで正門に突撃する巡洋艦に向けて、スティレットは決意に満ちた表情でソルカノンを発射したのだった。

「ソルカノン、ファイヤ！！」

凄まじい威力の青色の閃光が、展開されたアンチビームフィールドをあっさりと無力化し、巡洋艦を貫く。

正門の一步手前で墜落し、炎上する巡洋艦。

特攻が失敗に終わった形になってしまったが、しかしこれもまたコウゾウの計画通りなのだ。

「ソルカノン射出完了！！次のエネルギーチャージ完了までヒトマル・ミニユート(10分)！！艦の出力がゴーマル・パーセント(50%)に低下！！出力のリカバリーまでサン・ミニユート(3分)！！」

「ステラ、リカバリーと次発チャージを急いでください。ジャクソンは直ちにJHSシステムの準備を。」

『了解だ！！任せろ！！』

「シオンとナナミはそのまま2人の足止めを。ここは私たちだけで大丈夫です。」

『『了解！！』』

そしてソルカノン発射を見届けたコウゾウが、この時を待っていたと言わんばかりに指示を出す。コーネリア共和国に送り込んだ諜報部隊からの情報によって、ソルカノンの存在でさえも既にコウゾウは把握していたのだ。

連射が出来ず、使用後はしばらくの間バハムートの出力が低下するという、ソルカノンが抱える致命的な弱点さえも。

その隙を突く為に無人艦を遠隔操作で城門へと特攻させ、バハムートにソルカノンを撃たせた上で、万全の状態強化人間部隊の少女たちを投入する。

ここまでは、まさにコウゾウの思惑通りだったのだが・・・。

「これで奴らは後10分はソルカノンを使えないはずだ！！カミカゼ部隊出撃！！この隙を突いてバハムートを撃墜するのだ！！」

『『『『『『『『承知致しました。偉大なる天皇大將軍様。』』』』』』』』』』

コウゾウの指示と同時に、洗脳、記憶消去を施された強化人間の少女たちがマガツキを身に纏い、リニアカタパルトで一斉にバハムートに向けて飛翔する。

その様子をエミリアが、バハムートのモニターから厳しい表情で見据えていたのだった。

「敵旗艦アマテラスよりマガツキ、ヒトマル(10)！！例の強化人間部隊だと推測されます！！」

「ここまでは予定通りですね。ステラ、対空砲火と魔法障壁の準備を。」

「イエス、ママ！！」

「この戦い、ただ勝つだけでは意味が無いのです。彼女たちを救った上で、コウゾウの愚かさを世界中に知らせなければ・・・！！」

決意に満ちた表情で、エミリアは強化人間の少女たちの虚ろな瞳を見つめていたのだった。

2. 暴かれた愚行

コーネリア共和国軍の地上部隊が戦いを優位に進める最中、この戦いの流れを変えるべく、マガツキを身に纏った強化人間の少女たちが一斉にバハムートに襲い掛かった。

バハムートの砲台から一斉に大量のミサイルやビームが放たれるが、強化人間の少女たちは凄まじいまでの反応速度、そしてマガツキの高機動でもって巧みに避け続ける。

「偉大なる天皇大將軍様に逆らうエミリア・コーネリアには、無慈悲なる死を。」

「崇高なる天皇大將軍様に齒向かう愚か者共は、皆殺す。」

「殲滅せよ。愚か者共を一人残らず殲滅せよ。」

「全ては大いなる天皇大將軍様の為に。」

虚ろな瞳でバハムートにビームマシンガンやビームキャノンに浴びせる強化人間たちの少女たち。彼女たちからは人としての心、生气という物が全く感じられなかった。

「強化人間部隊からの一斉砲撃開始！！艦の周囲に魔法障壁を展開します！！」

その凄まじい猛攻に対抗する為、スティレットはバハムートの周囲に無数の魔法障壁を展開するが、ソルカノン発射直後で艦の出力が低下しており、本来の威力を十分に引き出す事が出来なかった。

ビームマシンガンとビームキャノンで障壁を消耗させられた所へ、ミサイルランチャーから放たれたミサイルが情け容赦なく障壁を貫き、バハムートに直撃した。

その凄まじい衝撃で、指令室が派手に揺れる。

「右舷後方にミサイル被弾！！損傷軽微！！艦の運行に支障ありません！！」

「さすがにやりますね。ステラ、フェザーファンネルで彼女たちの迎撃を。」

「イエス、ママ！！フェザーファンネル射出、ゴー！！」

バハムートから30基ものフェザーファンネルが放たれ、強化人間の少女たちを一斉に全方位オールレンジ攻撃を仕掛けるが、強化人間の少女たちはその凄まじいまでの反応速度でもって避けまくり、次々とフェザーファンネルをビームマシンガンで破壊していく。

「やはり自動制御ではシオンのようにはいきませんか。まあ彼が変態なだけなのですがね。」

「フェザーファンネル、ヒトマル(10)基大破！！左舷前方にビームキャノン被弾！！強化人間部隊の2人に砲台に取り付かれました！！ビームサーベルで砲台を次々と破壊されています！！」

「逆に好都合ですよ。マリナ、そのまま彼女たちを引き付けつつ、艦を後退させて下さい。」

「了解！！」

強化人間部隊の少女たちに追い詰められ、徐々に後退していくバハムート。

その様子をコウゾウが、高笑いしながら見据えていたのだった。

「馬鹿め！！今更ファンネルなどで奴らを止められるとでも思っているのか！？」

「敵旗艦バハムート、砲撃を維持したまま後退していきます！！」

「地上部隊を再び城門へと突入させろ！！この機を逃すな！！奴らを一気に叩きのめすのだあつ！！」

「了解！！」

コウゾウの命令で、後退していたジャパネス王国軍の地上部隊が再び城下町の正門へと突撃していく。

コーネリア共和国軍におけるシオン同様、ジャパネス王国軍においてもまた、強化人間部隊の少女たちは絶対的な「エース」・・・彼女たちの活躍の是非によって、戦いの流れはこうも大きく変わってしまうのだ。

『おいおい、なぶり殺しにされてるぞエミリア様！！』

「落ち着きなさい。この程度ならバハムートは沈みませんよ。このまま予定通り彼女たちをJHSシステムの効果範囲内に引き付けます。ジャクソン、私が合図したらJHSシステムの発動を。」

『了解だ！！任せろ！！』

強化人間部隊の少女たちの猛攻により、次々とバハムートの砲台が破壊されていく。

次々と直撃するビームとミサイル。バハムートから立ち上る黒煙。

城下町の人々の多くが、不安そうな表情でその様子を観戦していた。

頼みの綱のシオンとナナもホテルとカズマに足止めされており、エミリアの援護に向かう事が出来ない。

こんな状況では、確かに市民たちが不安になるのも仕方が無いと言えるが。

だが、それでも。

「ソルカノン、エネルギーチャージ・サンマル(30)%！！ソルカノン発射に伴い低下していた艦の出力が完全回復しました！！」

「ステラ、砲撃を止めて、魔法障壁を最大出力で展開。彼女たちをJHSシステムの効果範囲内まで引き付けて下さい。」

「イエス、ママ！！」

「ジャクソン、JHSシステム・・・いけますね？」

『おうよ！！いつでもいけるぜ！！』

ジャクソンの自信満々な回答を得たエミリアが、決意に満ちた表情で告げる。

「そうですか。ではこの戦い・・・我々の勝利ですね。」

何とこの絶体絶命の状況でさえも、全てエミリアの作戦通りだったというのだ。

「敵旗艦バハムートからの弾幕が止まりました！！砲撃に使用していた魔力を全て魔法障壁に回した模様です！！」

「馬鹿め、追い詰められて遂に自暴自棄になったかエミリア！！そのままカミカゼ隊を突撃させる！！」

「了解！！」

自らの勝利を確信したコウゾウが思い浮かべるのは、バハムートが爆炎を上げて沈む光景。

いかに精鋭を誇るコーネリア共和国軍といえども、それもスティレット・ダガーの恩恵があればこ

そ…そのスティレット・ダガーが使えないとなれば、所詮はこんな物なのだ。

いよいよだ。いよいよコーネリア共和国が独占している魔法化学技術を、マナエネルギーを、自らの手中に収める時が来たのだ。

この時までは…そう、本当にこの時までは、コウゾウはドヤ顔でいられたのだ。

まさかこの僅か1分後に、コウゾウの表情が一気に絶望に染まる事になるとは…この時の誰もが思わなかっただろう。

「強化人間部隊、全員JHSシステムの有効範囲内に入りました！！」

「ジャクソン、システム発動！！」

『おっしやあ！！』

エミリアの合図と同時に、突如バハムートの機首から放たれる凄まじい閃光。

だが眩し過ぎるという訳では無く、むしろ安らぎを感じるかのような…そんな慈愛に満ちた光が強化人間部隊の少女たちを包み込む。

次の瞬間、その優しくも温かい光に包まれた強化人間たちの少女たちの虚ろな瞳から、みるみる内に生気が戻っていった。

先程までバハムートに猛攻を仕掛けていた強化人間たちの少女たちが、攻撃の手を止め、呆気にとられた表情で、一体何が起きたのかと周囲を見渡している。

「…え…？」

「あ…あれ…？」

「わ…私たち…一体何を…。」

互いの顔を見合わせ、何が起きたのか理解出来ないという表情をする少女たち。

コウゾウもまた、何が起きたのか理解出来ないとばかりに、啞然とした表情をしている。

「な、何だ…！？一体何が起きたというのだ！？」

「データ分析完了！！精霊魔法リアライズ発動によって放たれた光だと推測されます！！」

「そんな事は分かっておるわ！！カミカゼ隊の連中に何が起きたのかと聞いておるのだ！！」

焦りと苛立ちを隠せないまま、オペレーター的女性士官を怒鳴り散らすコウゾウだったのだが。

『勇敢なるジャパネス王国軍の皆さん。どうか攻撃の手を止め、私の声に耳を傾けて頂けませんか？私はコーネリア共和国王妃、エミリア・コーネリアです。』

「な…！？」

突然バハムートから、エミリアの演説が届けられたのだった。

一体何事なのかと、ジャパネス王国軍の兵士たち、そして強化人間部隊の少女たちも、カズマとホテルも、攻撃の手を止めて一斉にエミリアの言葉に傾注する。

そしてエミリアの口から飛び出したのは、誰もが予想もしていなかった信じられない言葉だった。

『突然ですが今現在バハムートに取り付いている、マガツキ部隊の10人の少女たちについてなのですが…たった今我が軍のJHSシステムによって、コウゾウに施された洗脳を解除、同時に消去された記憶も復元致しました。』

「は…はああああああああああああああああああ！！？」

まさかの信じられないエミリアの言葉に、コウゾウの表情が一気に絶望に染まってしまう。

洗脳を解除って。記憶を復元って。一体この女は何を言っているのかと。

そしてジャパネス王国軍の兵士たちも突然のエミリアの通告に、誰もが驚きと戸惑いの表情を浮かべていた。

彼女たちが洗脳、記憶消去を施されていた強化人間だという事実を知っているのは、軍の中でも極一部の者たちだけに過ぎなかったからだ。

彼女たちは表向きには、独自に結成されたばかりのフレームアームズ・ガール部隊・・・ただそれだけだという事になっていたのだが。

『ジャクソン(J)が鼻くそ(H)ほじりながら作った洗脳(S)解除システム・・・名付けてJHSシステムです。』

「せ、せ、せ・・・洗脳解除システムだとおっ!？」

『正確には私の精霊魔法リアライズを強化する為の、ブースターのような物なのですがね。以前ステラがヴィクターに施された洗脳に関するデータを基に、ジャクソンに作って貰いました。』

諜報部隊を送り込んでいたのはコウゾウだけではない。エミリアもまたジャパネス王国に諜報部隊を送り込んでいたのだ。

そして強化人間部隊の少女たちの事を知らされたエミリアは、彼女たちを救う為にJHSシステムをジャクソンに作らせていたという訳だ。

精霊魔法リアライズ。これは元々は毒や麻痺などといった対象の状態異常を治療する為の治癒魔法で、これ自体は別に何も特筆するような代物ではない。精霊魔法の術者が一番最初に習得する初歩的な魔法だからだ。

だがジャクソンは以前シオンから提供を受けたスティレットの洗脳に関するデータを基に、この精霊魔法リアライズの威力を強化し、「洗脳や記憶消去などの脳障害を治す事に特化させる」為のシステム・・・言わばエミリアが言うブースターを作り出したのだ。

ただしシステムの有効範囲がどうしても限られてしまうので、彼女たち全員にバハムートの近くに来て貰わないといけなかったのだが。

その為にエミリアはわざと追い詰められる事で、彼女たちをおびき寄せていたというわけだ。

「ば・・・馬鹿な事を・・・!! 朕がそいつらを洗脳したという証拠でもあるのか!? 証拠も無しに朕を陥れようなどと・・・!!」

『そう言うだろうと思って証拠も用意してありますよ。ステラ、例の動画を世界中に配信して下さい。』

『イエス、ママ!!』

次の瞬間、スティレットの手によって動画サイトに配信されたのは・・・紛れもなく彼女たちが機械に拘束され、まさに洗脳を施されている光景だった。

誰もが苦しそうに呻き声を上げ、口からヨダレを垂らしながら必死にコウゾウに許しを請い、助けを求めるものの、コウゾウはそんな彼女たちをへらへら笑いながら見下している。

その動画へのアクセス数は瞬く間に数十万、数百万、数千万に達し、世界中でとんでもない騒ぎになってしまっていた。

これは誰がどう見ても、明らかに非道な人体実験・・・悪質な国際条約違反だからだ。

確かにエミリアがその気になっていれば強化人間の少女たち全員を、この場で皆殺しにする事は出来た。

だがエミリアが言っていたように、それでは意味が無い。ただ勝つだけでは意味が無いのだ。

彼女たち全員を救い、コウゾウの愚行を世界中に知らしめた上で、この戦いに勝利しなければ。

「馬鹿な！？強化人間はホテルだけでは無かったのか！？俺は何も聞いてないぞ！！」

「ワタナベ中佐！！こんな愚かな男に付き従うのが、貴方の軍人としての本分なのですか！？」

「くっ…！！」

戸惑いを隠せないカズマに、ナナミの厳しい言葉が激しく突き刺さる。

軍人の本分は国を、そして国民を、命を懸けて守る事…その為にカズマは今までその身を粉にして働いてきた。

今回のコーネリア共和国侵攻にしても、軍人である以上は上層部からの命令は絶対、逆らえば抗命罪に問われるという事もある。

だが何よりも魔法化学技術を手に入れ、国を豊かにする為という大義名分があったからこそ、個人的には不本意ではあったが、こうしてホテルと共にシオンやナナミと死闘を繰り広げていたのだ。

しかし…もしこの動画が事実であったとするならば…ナナミが指摘するように、これ以上コウゾウに付き従う意義などあるのだろうか。

そしてそれは他のジャパネス王国軍の兵士たちにとっても同様だったようで、兵士たちの多くが動揺を隠せず、完全に混乱状態に陥ってしまっていた。

『天皇大將軍様！！これは一体どういう事なのですかな！？もしこれが事実であるならば、貴方の行為は悪質な国際条約違反ですぞ！！』

「お、愚か者！！朕はこいつらを救う為に…そうだ、これはこいつらが6年前の震災のショックで重度のPTSDを発症していたから、それを癒す為の洗脳なのだ！！」

『癒す為ですと！？どこからどう見ても、彼女たちは苦しんでいるではありませんか！！』

「き、貴様ら、朕に逆らうつもりなのか！？朕を誰だと思っておるのだ！？抗命罪に問われたいのか貴様らはあつ！？」

このように、コウゾウに謀反を起こす兵士たちまで何人も現れる始末だ。

そんなコウゾウをさらに追い詰めるべく、エミリアはさらなる攻勢を仕掛けたのだった。

『皆さんが先程観ていた通り、コウゾウ・アキシノミヤは彼女たちを洗脳するなどという、極めて悪質な犯罪行為を犯しました。よって我々は只今よりコウゾウ・アキシノミヤを虐待の容疑で拘束する為、旗艦アマテラスに対しての一斉攻撃を行います。』

「エミリア貴様あ！！最初からこれが狙いだっただのかあつ！？」

『勇敢なるジャパネス王国軍の兵士の皆さん。貴方たちに少しでも人としての心が残っているのであれば…直ちに戦闘行為を中止し、道を開けなさい！！』

「ふざけるな！！全軍直ちに攻撃を再開せよ！！あの女の戯言(たわごと)に耳を…っ！？」

次の瞬間、艦内に鳴り響くアラーム、そしてオペレーターの女性士官から届けられた信じられない言葉が、コウゾウをさらに動揺させたのだった。

「後方より熱源感知！！ステイレット・ダガー10！！アイラ隊です！！」

「な、何だとおっ！？そんな馬鹿なあつ！？」

コウゾウの目の前の大型モニターには、アイラやアリュージャらステイレット・ダガー部隊の少女たちが突撃する光景が、情け容赦なく映し出されていたのだった。

3. ただ大切な物の為に

「総員バックウォーム解除！！目標敵旗艦アマテラス！！とっとと片付けてこんな下らない戦争にケリを付けるよ！！」

「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」」」

アイラの命令で今まで森の中に隠れていたスティレット・ダガーを身に纏った少女たちが、一斉にマントを脱ぎ捨て上空に飛翔。コウゾウがいる旗艦アマテラスに突撃を開始する。

慌ててコウゾウの命令でアマテラスや周辺の艦隊からの一斉砲撃が行われるが、高速で動き回る彼女たちを捉えられない。

「よーし、やっちやうよー！！」

放たれるミサイルをアリュージャがマナ・ビームマシンガンで次々と撃ち落とす光景に、コウゾウの表情は完全に絶望に染まってしまっていたのだった・・・。

「そんな馬鹿な・・・！？スティレット・ダガーは一斉メンテナンスで使えないはずだ！！」

『情報操作の為に、貴方が送り込んだスパイを敢えて泳がせておいたのですが・・・まさかこんな嘘の情報に、こうも簡単に引っ掛かるとは思いませんでしたよ。』

「じょ・・・情報操作・・・！？嘘の情報だと・・・！？」

『敵が攻めて来ると分かっているのに、主力兵器の一斉メンテナンスなんてする馬鹿がどこにいますか。』

完全にスティレット・ダガーがいない物だと思い込んでいたコウゾウは、主力部隊のほとんどを城下町への攻撃に回してしまっており、アマテラスは完全に無防備の状態だ。

それに加えて先程の洗脳動画を見せつけられた兵士たちが動揺し、謀反をする兵士たちまで何人も出るなどの混乱状態に陥り、指揮系統が完全に乱れてしまっている。

これまでバハムートがフルボッコにされていた・・・これはエミアの策で、わざとだったのだが・・・その鬱憤を晴らすかのように、先程まで守勢に回ってばかりだったコーネリア共和国軍が一転して攻勢に転じたのだった。

『リニアカタパルト、エンゲージ。オラトリオ隊、全機全システムオールグリーン。射出タイミングをアキトさんに譲渡します。』

そしてバハムートのリニアカタパルトから、万が一強化人間の少女たちの洗脳解除が失敗した時に備えた艦の防衛の為に、今まで艦内で待機していたアーキテクラオラトリオ隊が、スティレットからのナビゲートを受けて出撃準備に入ろうとしていた。

「命令とはいえ、艦が無様にやられているのをただ黙って見ているだけというのは、正直落ち着きませんでしたよ。危うく命令違反を犯して飛び出してしまいそうでした。」

「その鬱憤をこれから存分に晴らせばいいさ、マチルダ。だが窮鼠猫を噛むという言葉がある。追い詰められたネズミは何をしでかすか分かん。最早我々の勝利は決したも同然だが、油断だけは絶対にするなよ。いいな？」

「イエス、ママ！！」

スティレット・ダガーを身に纏ったマチルダが、真剣な表情でアーキテクトに敬礼をする。

『進路クリア。オラトリオ隊、発進どうぞ！！』

「さあメインディッシュを頂こうか！！これよりアイラ隊を援護する！！オラトリオ隊、出るぞ！！」

「[[[[イエス、ママ！！]]]]」

アーキテクト、そして轟雷、迅雷、マテリア、マチルダが、一斉にバハムートから出撃。

その情け容赦の無い絶望的な光景は、コウゾウの目の前の巨大モニターにもしっかりと映し出されていたのだった。

「さらに敵旗艦バハムートより熱源感知！！スティレット・ダガー4、スティレット・リペアー！！オラトリオ隊です！！」

「ええい、ワタナベ中佐と001は何をやっているのだ！？」

「現在アルザード大尉、キサラギ少尉と交戦中！！押され気味です！！」

「押され気味だと！？あの役立たず共があつ！！一体何をやっているのだあつ！？」

コウゾウたちの救助に向かおうにも、カズマとホタルは完全にシオンとナナミに足止めを食らってしまっていた。

ホタルを援護しようとビームキャノンに放とうとするが、突然死角から放たれたフェザーファンネルの一撃で、ビームキャノンを大破させられてしまう。

「ホタルと戦いながら、片手間でキサラギ少尉の援護を！？何と言う男なのだ！？」

「ワタナベ中佐！！もうジャパネス王国軍に勝ち目はありません！！どうか降伏を！！」

「まだだぞ！！キサラギ少尉！！」

ビームキャノンの残骸を投げ捨て、懐からビームサーベルを取り出したカズマが、決死の覚悟でナナミに斬りかかった。

互いのビームサーベルが何度もぶつかり合い、2人の周囲に糸状の閃光が走る。

「何故ですか！？天皇大將軍の愚かさは貴方も思い知ったはずでしょう！？なのに何故そこまで命を懸けてまで、あの男を守ろうとするのですか！？」

「例え愚王であろうとも、国の柱たる天皇大將軍様が今いなくなってしまうと、それこそ指導者を失った我が国は大混乱に陥ってしまうだろう！！それに！！」

ナナミを弾き飛ばしたカズマが、ビームライフルをナナミに乱射する。

咄嗟にプレズヴェルク・ダガーをストライダー形態に変形させて避けまくるナナミだったが、カズマの正確無比の射撃によって、プレズヴェルク・ダガーの機首に被弾。

慌てて直撃部分をパージしたナナミが、プレズヴェルク・ダガーをフレームアーム形態に変形させて体勢を立て直す。だがそこへ迫るカズマのビームサーベル。

何とかマナ・ビームシールドでカズマの一撃を受け止めるナナミだったが、カズマの気迫の前に完全に押されていた。

「それに天皇大將軍様は、俺に君と戦えと仰られた！！ならば俺は軍人として、国と国民を守る為、祖国でこの戦いを見ているであろう国民に勇気と希望を与える為、俺が君と戦う姿勢を国民に見せつけなければならぬのだ！！」

「何て悲壮な覚悟なのですか・・・！？ワタナベ中佐、貴方は軍人であり過ぎた！！」

「そうだ、俺は軍人だ！！だから俺は今ここにいる！！そして君の敵になった！！」

カズマの渾身の一撃が、ナナミのマナ・ビームシールド発生装置を完全に破壊した。

「くっ・・・！！」

「それに君たちコーネリア共和国軍では規律が比較的緩いようだが、我が軍において敵前逃亡や抗命罪は、時効無しの重罪！！最悪家族や親族もろとも即刻その場で死刑なんだ！！だからこれは国民の為だけではない！！両親やホテルを守る為の戦いでもあるんだ！！」

そう、これは最早カズマ個人の戦いではない。カズマにも守らなければならない物があるのだ。だからコウゾウが愚王だと分かっている、それでもカズマは守りたい物の為に・・・ただ大切な物の為に、こうしてシオンやナナミと命を懸けて戦っているのだ。

そしてそのカズマの姿勢、その覚悟は、今もこの戦いを戦場カメラマンを通じてライブ中継で観戦しているであろうジャパネス王国の国民たちに、勇気と希望を与える事にも繋がる。それはコウゾウが愚王であろうと無かろうと関係無い事なのだ。

「俺の前に立ちはだかるのであれば、例えかつての同胞だろうと、君には今ここで死んで貰うぞ！！キサラギ少尉！！」

体勢を崩したナナミに、カズマの渾身のビームサーベルの一撃が迫る。

だがそれでもナナミは諦めない。ここで諦める訳にはいかないのだ。

今のナナミにもカズマ同様、守らなければならない物があるのだから。

そう・・・今のナナミの腹の中には、シオンとの間に身ごもったばかりの赤子が。

ナナミもカズマと同じだ。ただ大切な物の為に、命を懸けてカズマと戦うのだ。

「斬り捨て、御免えええええええええええん！！」

カズマのビームサーベルが、ナナミのブレスヴェルク・ダガーの右舷を切り裂く。

「これでもう変形は出来まい！！」

「まだあああああああああああああああつ！！」

「何いっ！？ぐあああああああああああつ！！」

だがカウンターで繰り出されたナナミのマナ・ビームサーベルによる一撃が、カズマのマガツキの背中の飛行ユニットを破壊した。

両者、壮絶な相打ち・・・互いにフレームアームを損傷させられた2人が爆風で吹っ飛ばされ、力無く地上へと落下していく。

「ナナミ！！」

「カズマ中佐！！」

慌てて戦闘を中断し、互いに別の方向に吹っ飛ばされたナナミとカズマを救助に向かうシオンとホテルだったのだが。

「くっ、ワタナベ中佐が言うように、これでは変形した所で機体のバランスが・・・！！緊急安全装置作動、マナエネルギー完全開放、何とか墜落の衝撃を・・・！！」

『ナナミさん！！』

「ステイレット！？」

は万全の状態のイクシオンを纏ったナナミが。

シオンもシオンでホタルとの死闘の最中に左腕を負傷し、派手に出血してしまっているようだが・・・それでも戦えない程の傷では無いようだ。

この状況ではどう考えても、これ以上戦った所で確実にシオンとナナミに殺される・・・戦闘継続は不可能だった。

エミリア様ならば、決して悪いようにはしないだろうと・・・それを信じたカズマは何とか身体を起こし、両手を上げてナナミに降伏の意志を示したのだった。

「・・・分かった。俺とホタルは君たちにコーネリア共和国軍に降伏する。」

「カズマ中佐、しかしそれでは・・・！！」

「ただし先程のカミカゼ隊と同様に、エミリア様の精霊魔法でホタルを治して頂く事が条件だ。」

「・・・カズマ中佐・・・。」

決意の表情のカズマを見たホタルもまた、何とか身体を起こして両手を上げる。

それを確認したナナミが深く溜め息をつき、マナ・ホーリービームサーベルを懐に収めた。

「当然です。エミリア様もそれを心から望んでおられますから。」

「感謝する、キサラギ少尉・・・それと・・・。」

立ち上がったカズマは、突然ナナミに深く頭を下げた。

いきなりの出来事に啞然とし、思わずカズマに抗議しようとするホタルだったが、カズマのとても辛そうな表情を見て思い留まってしまう。

そして啞然としていたのはナナミも同じだったのだが・・・カズマの口から語られたのは、ナナミが思いもしなかった贖罪(しょくざい)の言葉だった。

「6年前の大震災の、あの日・・・俺は避難所から必死に電話をしてきた君を見捨てるような事を言ってしまった。自分たちだけで何とかしてくれなどと・・・上層部から命じられていた事だとはいえ、何て事を言ってしまったんだと、俺は今でも激しく後悔しているよ。」

「・・・じゃあ6年前・・・あの電話で私と話していたのは・・・まさか・・・」

あの時電話で軍に助けを求めて来た少女が、まさかこうして時を経て敵として自分の前に現れ、よもや殺し合う羽目になってしまうとは。

運命というのは何と残酷な物なのか・・・それでもカズマはナナミに対し、心からの謝罪を行ったのだった。

「今更こんな事を言った所で、君に許して貰えるなどとは到底思っていない。だがそれでも言わせてくれ・・・キサラギ少尉、6年前に君を救ってやれなかった事・・・本当に済まなかった。」

4. 一方的な蹂躪

カズマがナナミに敗北した・・・その事実はコーネリア共和国軍に希望を与え、逆にジャパネス王国軍には絶望を与えた。

コーネリア共和国軍にとってのシオンと同様、カズマもまたジャパネス王国軍における絶対的な「エース」・・・彼の勝敗によって両軍の士気が左右され、戦局を大きく動かしてしまう物なのだ。

それに加えて先程スティレットによって世界中に流された、コウゾウによる強化人間部隊の少女

その凄まじい怒気に気圧され、思わずコウゾウは後ずさってしまう。

『貴方なんか王じゃない！！このままコーネリア共和国軍に蹂躪されてしまえばいいのよ！！』
「貴様らあつ！！どあああああああああつ！？」

アイラ隊による一斉攻撃で、再び派手に揺れる指令室。

「何をやっている！？エミリアがやったのと同じ様に、あ、あの小娘共も早く洗脳せよ！！や、奴らが全員艦に取りついている今がチャンスだ！！早くやれ！！」

「無茶言わないで下さい！！本艦にそんな機能ありませんよ！！」

「そんな機能は無いだと！？そんな物は言い訳だ！！早く奴らを何とかせんか！！何とかせんか！！何とかせんかあつ！！ぐおあああああああつ！？」

切り札であるカミカゼ隊がコーネリア共和国軍に寝返り、カズマとホテルも敗れ、さらに主力部隊も指揮系統が大混乱状態に陥り、最早まともな戦闘継続が不可能な状況になってしまった。

このままではアイラたちに拘束されるか、最悪この場で殺される・・・その絶望的な状況が、コウゾウに冷静さを失わせてしまう結果になってしまったのだ。

そしてその状況がコウゾウに、国王としてあまりにも愚かな、最悪な行動を取らせてしまう事となってしまったのである。

「敵旗艦バハムート、ソルカノンの射出準備を確認！！本艦がロックオンされています！！」

オペレーターの女性士官がコウゾウからの指示を仰ぐものの・・・そこに最早コウゾウの姿は無かった。

「て・・・天皇大將軍様・・・！？」

まさか自分たちを見捨てて、退艦命令も出さずに1人で逃げ出したのか・・・まさかの出来事に取り残された女性士官たちの表情が絶望に染まる。

そのコウゾウは迫り来る死の恐怖に震えながら、慌てて大型の脱出艇にたった1人で乗り込み、エンジンを始動させた。

繰り返すが、

「艦が撃墜寸前の状況で」

「多数の人員を収容出来る大型の脱出艇に」

「部下たちに退艦命令も出さずに」

「たった1人で」

乗り込んだのだ。

その愚かなコウゾウの行為を目撃した整備兵の1人が、慌てて脱出艇の目の前に迫ったのだが。

「て、天皇大將軍様、一体どちらに！？」

「朕はここを脱出する！！さっさとどかんか！！このクズが！！」

「だ、脱出！？しかし退艦命令は未だ出ておりませんが！？」

「やかましい！！どけオラあ！！」

「ぐあああああああああああつ！！」

立ち足る整備兵を無理矢理脱出艇で轢き殺したコウゾウが、他の整備兵たちが唾然とする最中、慌てて脱出艇を走らせた…次の瞬間。

「ソルカノン、ファイヤ！！」

アイラたちが攻撃範囲から離脱した事を確認したスティレットが、情け容赦なくソルカノンを発射。再びバハムートから放たれた凄まじいまでの蒼白の閃光が、アマテラスを派手に貫いた。爆炎を上げ、墜落するアマテラス。間一髪の所で脱出に成功したコウゾウだったのだが…。

「…あれは…まさか…！！」

それを目撃したホタルが厳しい表情で、何とか無傷で済んだマガツキの飛行ユニットを展開し、慌てて脱出艇に向かって飛翔したのだった。

「ホタル！？」

「ちょ、いきなり何を…！？」

「嫌な予感がする！！済まないアルザード大尉、俺をホタルの所に連れて行ってくれ！！」

そしてソルカノンの余波を受けて制御不能になった脱出艇が、地上に派手に激突してしまった。

「ぐおあああああああああああああああつ！！」

慌てて飛び出してきたのでシートベルトをしていなかったのだが、そのせいでコウゾウの身体は地面に激突した衝撃で、ぽ〜んと派手に地上に投げ出されてしまったのだった。

受け身も取れずに地面に派手に叩き付けられたコウゾウが、苦しそうに呻き声を上げる。

「お…おのれ…っ…！！どいつもこいつもクズ共があつ！！」

自分が見殺しにした部下たちを平然と罵(ののし)りながら、コウゾウは地面に倒れ込んだまま、全身を襲う激痛に表情を歪めていたのだが。

そこへ目の前に駆けつけてきたホタルの姿に、コウゾウは歓喜の表情を浮かべたのだった。

「おお、001か！！朕を助けに来たのだな！？」

「……。」

ホタルだけは他のカミカゼ隊の少女たちと違い、バハムートから遠く離れた場所でシオンと交戦中だったので、エミリアの精霊魔法による洗脳解除を受けていない。

だからこそホタルだけは自分に従順でいてくれるはずだと…自分を助けてくれるはずだと…そう思い込んでいたコウゾウだったのだが。

「ど、どうした001！？何を黙って突っ立っておるか！？」

「……。」

「な、何をしている！？早く朕を安全な場所に避難させんか！？」

「……。」

コウゾウの目の前でシオンとの戦いで激しく損傷したマガツキの装甲をパージし、素体状態となったホタルが、とても厳しい表情でコウゾウを睨み付ける。

一向に自分を助けようとならないホタルに、コウゾウの歓喜の表情が徐々に怪訝に染まる。

そして次の瞬間・・・ホテルはコウゾウにビームハンドガンの銃口を向けたのだった。

「ひぎいっ！？」

「命を懸けて戦う部下たちを見捨てて、自分1人だけで逃げ出そうとするなんて・・・貴方は本当に愚かな男なのね。本当に6年前のあの時と同じ・・・！！」

「ぜ、001、これは一体何の冗談だ！？」

「本当ならアイラ隊に貴方を殺させるつもりだったけど・・・まあいいわ。彼女たちがしくじったのなら、私が直接この手で貴方を討つ。」

「001！！貴様は朕の忠実なる・・・！！」

「私は001なんかじゃない！！私はカエデ・ミツルギよ！！」

怒りと悲しみの形相で、自らをカエデと名乗ったホテルはコウゾウを怒鳴り散らした。

まさか、こんな事が・・・確かに洗脳と記憶消去を施したはずなのに・・・予想外の出来事に、コウゾウの表情が絶望に染まる。

「・・・カ、カエデ・・・ミツルギ・・・だと・・・！？貴様は一体・・・！？」

「私の事を忘れたの！？まあ貴方の事だから1人1人の事なんか、いちいち覚えていないでしょうけどね！！私は今も鮮明に覚えているわ！！6年前の震災の、あの時・・・貴方が私たち家族を見捨てた事を！！」

ビームハンドガンの銃口を突き付けながら、恐怖に震えるコウゾウに、ホテルは目に涙を浮かべながら、はっきりと告げたのだった。

「父様の仇、今ここで討たせて貰うわ！！コウゾウ・アキシノミヤ！！」

5. 6年前の真実

元々カエデはジャパネス王国に存在する小さな村の、地方領主を務めていたミツルギ家の一人娘として、決して裕福とは言えなかったものの、それでも優しい両親と共に静かで穏やかな、幸せな暮らしを送っていた。

当時、天皇大將軍の座についたばかりのコウゾウが絶対的な社会主義の政策を一方的に押し付け、領主を務めていた父親に自分の傘下に入るよう何度も要求。

それを父親が

「貴方がやろうとしているのは国民軽視の政策だ！！」

「国を活かすのは民だ！！民が生きなければ国は決して生きない！！」

「貴方のやり方ではいずれ民は行き場を失い、この国は必ず破滅する！！」

と反論し、コウゾウと何度も言い争うという騒ぎが何度もあったのだが、それでも特に大きな事件になる事はなく、カエデは優しい両親の下で健(すこ)やかに育っていったのである。

だがその幸せは6年前・・・カエデが12歳の頃に一瞬にして打ち碎かれる事となる。

ジャパネス王国を突如襲った、史上稀に見る最強クラスの大震災。

それによって次々と崩壊する建物。カエデの自宅も一瞬でゴミクズのように崩壊してしまう。

瓦礫の中に飲み込まれてしまったカエデと両親だったのだが、それでもカエデは偶然出来た瓦

礫の隙間にギリギリで入る事が出来、身動きは出来なかったものの奇跡的に瓦礫に押しつぶされずに助かった。

だが母親は瓦礫に押しつぶされて即死。父親も瓦礫が左胸を貫き、最早その命も風前の灯火となろうとしていたのである。

「た、助けて！！父様と母様が瓦礫に押し潰されて！！父様が左胸に酷い怪我を！！」

『分かりました。落ち着いて下さい、必ず救助に行きますから。場所はどこですか？』

「ミツルギ村の7-11番地、シュンヤ・ミツルギです！！」

『領主様のご自宅ですね。了解しました。たった今戻ってきたばかりの救助部隊がいますので、どうか諦めないで。すぐに救助の準備を・・・』

懐から携帯電話を取り出して、必死に軍に救助要請の電話をするカエデ。

彼女のすぐ隣では父親がとても苦しそうに呻き声を上げながらも、愛娘のカエデが無事だった事に安堵の表情を浮かべている。

だがこの傷では、自分は最早助からない・・・自分はあと数分で死ぬだろうと・・・父親はそれを確信していたのだった。

電話に出た女性オペレーターの励ましの言葉を聞いたカエデは、すぐに軍が救助に来てくれると・・・そう信じていたのだが・・・。

『おい、今のガキからの電話・・・確かシュンヤ・ミツルギだと言っていたな？』

『これはこれは天皇大將軍様！！わざわざ貴方様自らがこんな所までご足労頂かなくとも！！』

『よい。緊急非常事態故に敬礼は不要だ。それよりもミツルギ村への救助に救助部隊を動かす必要は無い。』

『はあ！？』

突然現れたコウゾウの言葉に、カエデも女性オペレーターも絶句してしまう。

一体この人は、この状況下において、何を言っているのかと。

そしてそのコウゾウに食って掛かる、戻って来たばかりの救助部隊と思われるカズマの声が、カエデの携帯電話から響いてきた。

『な・・・何を言っているのですか天皇大將軍様！！今こうして必死に助けを求める我が国の少女を、むざむざと見捨てると！？』

『ワタナベ准尉。物事には順序という物があるのだ。貴様らは先に宮殿に取り残された大臣たちの救助に向かえ。ミツルギ村への救助には別の部隊を向かわせる。』

『しかし！！』

『貴様も軍人ならば、もっと世の中の大局を見据える事を覚えよ。たかだか小さな村の地方領主の命と、国の中枢たる大臣たちの命・・・今最優先で助けるべきは一体どちらなのだ？』

人間の身体で例えるならば、心臓に穴が開いたので大掛かりな手術をするのと、指一本をちよつとナイフで切ってしまったので絆創膏を貼るのと、一体どちらが大惨事なのか。

これはかなり極端な例だが、コウゾウはそれをカズマに諭しているのだ。

カズマもコウゾウの言い分は、頭の中では分かっているつもりだ。

確かに「国」などという得体の知れない途方も無く大きな代物を、この有象無象の大震災から早急に立て直す為には、確かに国の中枢たる大臣たちの救助が最優先されるべきだ。

そのコウゾウの言い分は、実は決して間違っているとは言えないのだ。

たかだか1人の軍人如きの私情で、ミツルギ家の救助に動く事を許される局面ではない。カズマ

もそれは理解してはいるのだが…。

『もう一度言うぞ。貴様らは先に宮殿に取り残された大臣たちの救助に向かえ。ミツルギ家の救助には別の部隊を編成して向かわせる。』

『ですが、天皇大將軍様！！』

『これは命令だ。逆らう事は許さんぞ。貴様も軍人ならば一時の感情に流されるのではなく、国全体の利を考えて動くのだ。よいな？』

カズマも軍人である以上、国の最高指導者たる天皇大將軍の言葉には逆らえない。

これ以上の反論は自分のみならず、連帯責任として部下や上官たちまでも、抗命罪に問われる事になりかねないのだ。

それにミツルギ家への救助には別の部隊を編成して向かわせるとコウゾウが言っている以上、カズマもそれを信じて動くしかない。

『…了解致しました、天皇大將軍様。ただちに宮殿への救助任務に向かいます。』

『うむ。貴様たちの働き、期待しておるぞ？』

『はっ！！』

渋々ながらも敬礼をしたカズマが慌てて外へと飛び出していったのだが…女性オペレーターが必ず救助に向かわせる、どうか諦めないでと必死にカエデを諭し、電話を切った後。

「あ…あの男は恐らく…軍をこちらには…寄越さないだろうな…ゲホッ…ガハッ…！！」

「父様！！」

「そ…そういう男なのだ…あの男は…自分に逆らう者に対して…うっ…ゴホッ…！！」

父親がとても申し訳無さそうな表情で、カエデにそう告げたのだった。

口から盛大に血を吐き、とても苦しそうにしながらも…それでもただ愛娘のカエデの姿を、目に涙を浮かべながら見据えている。

「私が…あの男の傘下に大人しく入ってさえいれば…せめてお前だけでも…助けてくれたかも…しれないがな…。」

「そんな、父様は何も悪くないです！！父様は何も間違った事は言ってません！！」

「だが、たかが一介の地方領主でしかない私一人が…国を相手に…どれだけ足掻こうとも…済まないカエデ…こんな事になってしまって…お前だけは…せめてお前だけは…。」

「父様！！」

「最期の瞬間まで…諦めるな…必死に足掻くんだ、カエデ…お前は…私たち…の…生きた証…希望…。」

「父様、父様あああああああああつ！！」

「……。」

「うわああああああああああああああああああああああああああ！！ああああああああああああああああああああああああああ！！ああああああああああああああああああああああああ！！」

目の前で父親が死んでから6時間後…すっかり夜になってしまったが、それでも父親が懸念した通り、軍からの救助は一向に来なかった。

カエデは必死に瓦礫から出ようとするものの、それでも瓦礫は全くびくともしない。

他の近所の村人たちは一体どうしたのか。助けを求める声が一向に聞こえないが、やはり瓦礫の

中に飲み込まれて全員が命を落としてしまったのか。

何故・・・一体どうしてこんな事に・・・ただ村で静かに暮らしていただけなのに、自分たちが一体何をしたというのか。

カエデは自分たちに残酷な仕打ちをした神々、そして本当に救助を寄越さなかったコウゾウに対し、強い憎悪の心を燃やしたのだった。

私は必ず生き延びてやる、そしていつか必ずコウゾウに対して復讐を・・・！！絶望に心を支配されながらも、必死になって足掻くカエデだったのだが。

「済まない、遅くなって本当に申し訳無かった！！今助けるからな！！最後まで諦めるな！！」
「・・・え・・・？」

ただ1人、慌てて車で駆け付けて来たカズマが、ビームサーベルで次々と瓦礫を斬り捨てながら、スコップでの瓦礫の除去作業を行い始めたのだった。

いきなりの出来事に、カエデは驚きを隠せない。

「ど・・・どうして・・・？だって父様が、軍はきっと来ないだろうって・・・。」

「そうだな、君の言う通り、この村への救助命令は出ていない！！」

「だったら・・・どうして・・・？」

「だが勤務時間はもう終わったからな！！タイムカードも押したから、これは上から受けた任務ではない！！俺が勝手にやってるボランティアだ！！だからそんな物は関係無いんだよ！！」

言ってる事は無茶苦茶ではあるが、それでもカズマはカエデを救う事を、未だに諦めてはいなかったのだ。

本当にコウゾウが言うように、別動隊がこの村の救助に来ているのか・・・心配になって来てみれば、見ての通りご覧の有様だ。

確かにコウゾウが言うように、こんな小さな村を救う事よりも、国の中枢たる大臣たちを助ける事の方が大事なかもしれない。

いや、実際にコウゾウの言うように、そっち方が本当に大事なのだろう。

だがそれでも、目の前で助けを求めている人がいるのに、それをむざむざと見捨てるなど・・・それは「力無き人々を守る」という軍人としての本分、そしてカズマの信念に反する行為なのだ。

軍の任務として救助に行けないなら、今日の任務が終わってから任務外のボランティアとして、勝手にカエデを助けに行けばいいじゃないかと。

「周辺を搜索したが、この村の人々はもう全滅してしまったようだ！！今生きているのは君だけだ！！だが君は生きるんだ！！必ず生きて幸せを掴み取るんだ！！」

「軍人さん・・・！！」

「カズマ・ワタナベ准尉だ！！必ず君を助ける！！だから絶対に諦めるな！！」

必死にビームサーベルで瓦礫を斬り捨て、スコップでその瓦礫を除去するカズマ。

そのカズマの姿に、絶望の闇に染まったカエデの心の中に、一筋の希望の光が灯ったのだった。

「もう二度と俺の目の前で、誰一人として死なせてたまるものか！！絶対に君を助ける！！」

「カズマさん・・・私・・・私・・・！！」

「もう少しだ・・・もう少し・・・！！くっ・・・このっ・・・よしっ、これでどうだ！！うりやあっ！！」

ガラガラと、ホタルを覆いかぶさっていた瓦礫が、派手な音を立てて崩れたのだった。
カズマの手を掴み、必死に脱出するカエデ。そして緊張の糸が切れてすっかり安心してしまったのか、カエデはカズマに抱き着いて号泣したのだった。

「うわああああああああああああああああああああ！！うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！」
「もう大丈夫だ。今から君を難民キャンプに連れて行ってやるからな。」

こうしてカエデはカズマによって難民キャンプに連れて来られ、ひとまずの生を得る事が出来たのである。

カズマはその後、別の部隊に異動になってしまったようで、会う機会が取れなくなってしまったのだが、それでもいつかカズマのような軍人になりたいと・・・叶うならばいつかカズマの部下になって恩返しが出来ればと・・・その思いからカエデは中学卒業後に施設を出て、士官学校に入学した。

だが士官学校において多大な資質を開花させ、大活躍を見せたカエデに待ち受けていたのは・・・そのカエデの多大な資質を見込み、優秀なスパイにしようと目論んだコウゾウによる、カエデに対する洗脳と記憶消去だった。

当時からカエデは両親が死んだ事と震災の影響で、軍医からPTSDの疑いがあると診断されていたのだが、コウゾウはそれを癒す為に全てを忘れさせるという大義名分を振りかざし、反対する軍医たちを無理矢理納得させたのである。

果たして洗脳、記憶消去が無事に完了し、カエデはコウゾウの忠実なる下僕となり、001というコードネームを与えられる事となる。

そして戦闘技術だけでなく、房中術や家事全般などのスパイとして必要な技能も次々と習得していったのだが、そんなカエデに突然転機が訪れた。

運命というのは、一体どこまでカエデを翻弄すれば気が済むのか。

カズマが任務外で起こした行動だったが故に、カエデがカズマに助けられた事など知りもしないコウゾウだったのだが、そのコウゾウがカズマへの監視兼褒美として、カエデをカズマの下に送る事を決めてしまったのである。

それをコウゾウから通告されたカエデの洗脳は、カズマに関する資料を渡されたその瞬間に・・・本当に何の前触れも無く一発で解けてしまった。

カエデの洗脳が解けたという事実にコウゾウが気付かない程までに、本当にいきなり突然にだ。

それ程までにカエデにとって、カズマの存在はとてもし大きかったという事なのだろう。

同時に消された記憶を全て思い出し、再びカズマの傍に居られる喜びを存分にその身に感じながらも、必ずコウゾウに対して復讐を果たすと・・・それを心に誓ってしまったのである。

だがコウゾウの周囲の警備は嚴重だ。とてもじゃないが国内での暗殺は不可能だ。

ならば自分では無く、他の誰かにコウゾウを殺させれば、それでいい。

兼ねてより魔法化学技術を欲していたコウゾウは、度々コーネリア共和国に圧力を掛け続けていた。そのコウゾウの愚かな野心をカエデは利用する事にしたのだ。

諜報部隊からカエデの下に「スティレット・ダガーの一斉メンテナンスを行う」という、エミリアが敢えて流した「嘘の情報」が流れて来たのだが、その情報が嘘だという事を即座に見抜いたカエデは、敢えて「真実の話である」としてコウゾウに情報を流したのである。

それを無様に信じてしまい、コーネリア共和国に戦争を「仕掛けてしまった」コウゾウが辿った結末は・・・まあご覧の有様だ。

まさかコウゾウが部下を見捨てて、自分1人だけで戦場から逃げ出すような真似をするとはカエデも思っていなかったのだが、それならそれで戦場の混乱の中で、自分の手でコウゾウを始末してしまえばいい。

目の前には全身這う這うの体(ほうほうのてい)のコウゾウしかいない。そして今周囲にいるのは自分だけ。誰もコウゾウを助けになんか来やしない。

というか仮に周囲に味方部隊がいたとしても、部下を見捨てて自分だけ逃げ出すような男など、一体誰が命を懸けてまで助けるというのか。

コウゾウへの復讐・・・父の仇を討つ・・・。

その最大のチャンスが、こうして今ここに、カエデの前に訪れたのである。

6. 終戦

「・・・ま・・・まさか・・・6年前のあの時のガキが・・・貴様だったとでも言うのか・・・！？」

ホテルから真相を聞かされたコウゾウが、恐怖と絶望に染まった表情で、目の前のホテルの憎悪に満ちた表情に怯えていたのだった。

身体を震わせながら後ずさり、情けない事に小便を漏らしてしまっている。

およそ一国を統べる王として相応しくない、無様な醜態・・・それを見せつけられたホテルが思わず歯軋りしてしまう。

私はこんな男のせいで野垂れ死にそうになり、挙句の果てに洗脳されて、人生を狂わされてしまったのかと。

「あの時、カズマ中佐が私を助けて下さらなければ、今頃は私もあの瓦礫の中で飢えと渇きに苦しみ、数日間もがき苦しみながら野垂れ死んでいたわ！！貴方はそれでも構わないと思っていたんでしょ！？」

「ま、待ってくれ！！お前は何か勘違いをしている！！あの時は人手がどうしても足りずに、ミツルギ村まで救助部隊を派遣する余裕が無かったのだ！！お前の父親の事は本当に残念だった！！朕と思想と違(たが)えたとはいえ、奴は本当に有能な領主だったと朕は思って・・・！！」

あまりにも見苦しい言い訳をするコウゾウの足元の地面に、ホテルはビームハンドガンを一発放ったのだった。

その乾いた音が、コウゾウをさらに怯えさせる。

「ひ、ひいいいいいいいいいい！！」

「人員を割く余裕が無かった！？じゃあ何でカズマ中佐に私を助けに行く余裕があったの！？」

「そ、そうだ！！朕を無事に本国に送り届けてくれたら、貴様には特別褒章人の地位を与えよう！！滅多に与えられる事の無い最高の名誉だぞ！？特別褒章人になれば貴様には常に使用人が付き、さらに立派な車と豪邸も・・・ひぎゃああああああああ！！」

そのコウゾウからの愚かな提案は、逆にホテルの怒りにさらに火を注ぐ結果になるだけだった。

さらにホテルはビームハンドガンを一発、コウゾウの頬に掠(かす)めさせた。

コウゾウの頬から、つーっ・・・と、血が滴(したた)り落ちる。

「私が今欲しいのは、貴方の命・・・ただそれだけよ！！」
「ま、待ってくれ！！助けてくれ！！い、命だけはあつ！！」
「安心なさい！！貴方を拷問する趣味なんか無いから、一撃で楽にしてあげるわ！！」
「た、た、た、た、助けてくれ！！お願いだ001！！助けてくれえっ！！」
「私はカエデ・ミツルギだと言ったでしょう！？」

この期に及んで自分の事を001などと呼ぶコウゾウに、ホタルは心の底から失望していた。
やはりこの男は自分に対して、何の贖罪の心も持ち合わせていないのだと。

「コウゾウ・アキシノミヤあつ！！覚悟おつ！！」
「嫌だああああああああああああああああああ！！」

ホタルが手にするビームハンドガンから、銃声が響く。
だが放たれたビーム粒子は、コウゾウから完全にあさっての方向に飛んでいた。
シオンにお姫様抱っこされて慌てて駆け付けたカズマが間一髪ので、銃を手にするホタルの
右手首を咄嗟に後ろから掴んだのだ。

「駄目だホタル！！怒りと憎しみの心で力を振るっては！！戻れなくなるぞ！？」
「カズマ中佐・・・！！邪魔をしないで下さい！！この男は私の父様を！！」
「分かっている！！話は全て聞かせて貰った！！だがそれでも敢えて俺は言う！！こんな男の
為に君の手を血で染めてしまっは駄目だ！！」

泣き叫ぶホタルを必死に抱き締め、何とかなだめようとするカズマ。
まさか6年前に自分が助けた、あの時の少女が・・・こんなにも美しく成長して、6年の時を経て自
分の妻になろうとは。
何という運命の巡り合わせなのか。カズマは驚きを隠せないでいた。
どうりで初対面の時から、どこかで会ったような気がしたはずだ。
あまりにも美しく成長し、以前の面影がまるで無かった物だから、カズマも今まで全然気付かな
かったのだ。

「ワ、ワ、ワ、ワ、ワタナベ中佐！！早くその愚かな反逆者の女を始末しろ！！そいつは朕を殺そ
うなどという愚かな事を・・・！！」
「黙れ！！その原因を作ったのは、そもそも貴方だろう！！」
「ひぎいいいいいいいいいいいいいい！！」
「今は俺がホタルと話しているんだ！！貴方の話は後にしろ！！」

カズマに一喝されたコウゾウが、思わず黙り込んでしまったのだった。
そんな愚かなコウゾウなど完全に無視し、カズマは必死にホタルを抱き締め、ホタルを説得しよう
とする。

「ホタル、君が激情にかられ、こんな形でこの男を殺した所で、それでも君の心は絶対に救われ
ない！！俺には分かるんだ！！君と同じ様に、あの震災のせいで前妻を失った俺には！！君の
その怒りと憎しみの心は痛い程理解しているつもりだ！！」
「だったら・・・だったら私はどうすればいいのですか！？こんな男のせいで父様はあつ！！」
「この男はこのままコーネリア共和国軍に拘束させ、公式な刑事裁判によって公正な裁きを受け
て貰う！！恐らくは参考人として君にも検察からの事情聴取があるだろうが、君のそのやり場の無
い怒りと悲しみは、そこで検察に存分にぶつけなければいい！！」

そのホテルの怒りと悲しみは検察にとっては決定的な物証となり、裁判においてコウゾウへの厳罰がより加速する事になるのだ。

しかも部下を見捨てて退艦命令も出さずに、自分1人だけで脱出艇で戦場から逃げ出すような愚かな真似までしたのだ。コウゾウも法廷の場で自分の身を守る為の正当防衛を主張するだろうが、それでも厳罰は決して免れないだろう。

「ふ、ふざけるなよワタナベ中佐！！今の貴様の発言は明らかな朕に対しての抗命罪だ！！貴様もその女も、貴様の両親も、全員即刻死刑だ！！覚悟しておくがいい！！」

「貴方、この期に及んで、まだそんな馬鹿げた事を言っているの！？」

そこへナナミがとても厳しい表情で、カズマとコウゾウの間に割り込んで来た。

ホテルと同じ様に、6年前の震災でコウゾウに助けて貰えず・・・両親と弟を失った事への怒りをぶつけながら。

「キ、キサラギ少尉・・・！！」

「周りを見て御覧なさい！！貴方を助けようとする人なんか、もうどこにもいやしないわ！！」

ナナミの言う通り、この近辺にはジャパネス王国軍の兵士たちはどこにもいない。

いや、仮にいたとしても、自分たちを見捨てて1人だけ戦場から逃げ出そうとする愚かな男など、一体誰が命を懸けてまで助けようとするのか。

こんな男のせいで自分はホテルと同じ様に家族を失い、人生を狂わされてしまったと言うのか。

いや、コウゾウに洗脳されなかっただけ、ナナミはホテルより遥かにマシなのだろうが。

それでも6年前の大震災でナナミがルクセリオ公国に亡命しなかったら、もしかしたらナナミもホテルと同じ目に遭っていたかもしれないのだ。

それを想像しただけで、ナナミは思わずゾツとしてしまう。

マナ・ホーリービームハンドガンの銃口をコウゾウに向けながら、ナナミはその怒りを存分にコウゾウにぶつけたのだった。

「くそがあつ！！どいつもこいつもクズ共があつ！！朕を誰だと思っているのだ！？朕はジャパネス王国の天皇大將軍、コウゾウ・アキシノミヤであるぞ！！誰か早く朕を助けんかあつ！！」

「・・・そんな貴方だから、誰も貴方を助けようとしらないのよ。それがまだ分からないのかしら？」

「ま、待て！！この通りだ！！どうか、どうか朕を助けてくれ！！」

追い詰められたコウゾウがナナミに対して取った行動・・・それは土下座。

一国の王として、あまりにも無様だとしか言いようがない光景だった。

「ち、朕を助けてくれたら、貴様には出来る限りの謝礼はさせて貰うつもりだ！！そ、そうだ！！貴様は6年前の震災で家族を失ったのだろう！？その見舞金も支払おうじゃないか！！貴様の家族を弔う為の墓もちゃんと作らせる！！だから朕を助けてくれ！！」

「……………」

「そ、それだけじゃ不満か！？だったら倒壊した貴様の家も新しくコーネリア共和国に建て直してやろう！！以前とは比較にならん程の豪邸をな！！勿論費用は全部朕が持つ！！そ、それでいいだろう！？」

「……………」

「ま、まだ不満なのか！？だったら貴様の家族を慰霊する為の記念公園を…………！！」

コウゾウは、全く何も分かっていない・・・ナナミは目に涙を浮かべながら、目の前の愚物を睨み付けていたのだった。

ここまで読んで、お分かり頂けたらどうか。

これまでのコウゾウの口からは、コウゾウがナナミの家族を救ってくれなかった事に対する、そしてホタルを洗脳した事に対する、誠心誠意の謝罪、贖罪の言葉が一言も出ていないのだ。

どれだけコウゾウがナナミに対して見返りを提示しようが、そんな物は今のナナミにとっては、ただ空しいだけでしかなかった。

「ひ、ひぎいいいいいいいいいい！！ど、どうか助けてくれ！！お願いだから助けてくれえっ！！この通りだあっ！！」

「・・・だったら・・・だったらどうして・・・貴方は瓦礫に飲み込まれた両親と弟を助けてくれなかったの・・・！？自分はどうして必死に私と彼女に命乞いをする癖に！！」

目に涙を浮かべるナナミを、シオンもカズマもホタルも啞然とした表情で見つめている。

何故だ。何故こんな愚かな男が、ジャパネス王国の天皇大將軍という重役に就いているのか。

神は何故こんな愚かな男を、一国の王にしてしまったのか。

あまりにも残酷な仕打ちに、ナナミは居たたまれなくなってしまったのだった。

「貴方が・・・貴方がそんなだから・・・父さんも・・・母さんも・・・スバルも・・・！！」

ナナミが大粒の涙を流しながらマナ・ホーリービームハンドガンのロックオンをコウゾウから外し、目の前のコウゾウをほったらかして嗚咽した・・・次の瞬間。

「・・・馬鹿が！！」

隙を突いて懐からビームハンドガンを取り出し、ナナミを撃とうとしたコウゾウ。

だがそれは鍛えぬかれた軍人である、しかも最新鋭のフレームアームであるイクシオンを身に纏った今のナナミに対して、あまりにも愚かで無謀だとはしか言えない行動だった。

その直後、コウゾウの脳天に穴が開く。

コウゾウが引き金を引くよりも早く、ナナミがマナ・ホーリービームハンドガンでコウゾウの脳天を撃ち抜いたのだ。

どうっ・・・と、驚愕の表情のまま、地面に倒れ込んだコウゾウ。即死だった。

かつて自国の民だったナナミに撃たれ、殺されたコウゾウ。

何と言う皮肉な結末なのか。あまりにも哀れだとはしか言いようが無かった。

マナ・ホーリービームハンドガンを懐にしまったナナミが、ふうっ・・・と一息吐く。

「・・・ナナミ。辛かったら泣いてもいいんだぞ？誰も君の事を責めやしないさ。」

そのナナミの今の心情を察したシオンが、ナナミに優しくそう語り掛ける。

いきなり銃を向けて来たので正当防衛でコウゾウを殺してしまったが、家族の仇を討ったはずのナナミの心にあるのは、ただ虚しさだけだった。

確かにカズマがホタルに告げた通りだ。ナナミの心はコウゾウを討った所で、全然救われてなどいなかったのだ。

「・・・シオン隊長・・・っ！！」

感極まったナナミがシオンの身体を抱き締め、目から大粒の涙を流しながら号泣したのだった。そんなナナミを、シオンが優しく抱き止める。そしてホテルとの戦いで何とか無事で済んだ、残りのフェザーファンネル6基のうち3基を飛ばし、上空に信号弾を発砲。コウゾウが死んだ事を両軍の兵士たちに伝えた。最も今更シオンがコウゾウの死を告げた所で、生き残ったジャパネス王国軍の兵士全員が、最早それ以前に戦意を完全に喪失してしまっていたのだが。

「・・・エミリア様、聞こえますか？コウゾウ・アキシノミヤを拘束しようとしたものの、銃で突然不意打ちして来たので、止むを得ずナナミが正当防衛の為に射殺しました。」

『ご苦労でしたね、シオン。ナナミも辛かったですでしょう？ナナミがパージしたフズヴェルク・ダガーを回収するついでに、護送車をそちらに送ります。後の処理は私たちに任せて、貴方たちはゆっくと休みなさい。』

「それで、ワタナベ中佐と彼女の処遇はどうしましょう？」

『その2人には色々聞きたい事があります。こちらに戻るついでに、2人を護送車で一緒に連れて来て貰えませんか？決して悪いようにはしないと2人に伝えておいて下さい。』

「はっ！！」

ナナミを抱き寄せながら、シオンはエミリアに敬礼したのだった。

7. これからも

かくして今回のコーネリア共和国軍とジャパネス王国軍による戦争は、エミリアの奇策とコウゾウの無能さが完全に表に出た形となり、コーネリア共和国軍の圧勝に終わった。

ジャパネス王国軍、負傷者、戦死者共に多数。

旗艦アマテラスや高速巡洋艦ハルカゼを失うなど、全戦力の70%を損失。

カミカゼ隊の少女10人、コーネリア共和国に亡命。後に全員が新生マガツキ部隊としてコーネリア共和国軍に入隊。

天皇大將軍・コウゾウ・アキシノミヤ・・・戦死。

コーネリア共和国軍、負傷者63名。内訳、軽傷者52名(シオン含む)、重傷者11名。

旗艦バハムート、カミカゼ隊による猛攻を受けるも、損傷軽微。

シオンがホテルとの戦いで左腕を負傷。戦闘終了後にエミリアが創り出した医療用スライム「回復くん」による修復治療を受け、後遺症も残さず無事に完治。

戦死者・・・ゼロ。

今回のコーネリア共和国軍の圧勝劇は、コウゾウの愚かさと共に、歴史にその記録を刻む事になるのである。

カズマとホテルはエミリアからの事情聴取を受けた後、すぐに釈放。ジャパネス王国に戻り、新たに就任した天皇大將軍の下で働く事となった。

ナナミからはコーネリア共和国への亡命を勧められたが、それでもカズマは自らの故郷であるジャパネス王国に戻る道を選んだのだ。

「ああそうだ。今までバタバタしてて、ずっと気にする余裕が無かったんだけど・・・。」

「え？」

「君の事は、これからはカエデと呼んだ方がいいのかな？」

ある日の昼・・・任務で児童養護施設に支援物資を届けに行った際、ふとカズマがホタルにそう質問したのだが。

「ほら、君の本当の名前はカエデ・ミツルギって言うんだろう？だったらホタルじゃなくて、そっちの方が・・・。」

「・・・いいえ、ホタルでいいです。これからは私の事はホタルとお呼び下さい。」

「本当にそれでいいのかい？」

「はい。カズマ中佐が私にお与え下さった、とても大切な名前ですから。」

とても穏やかな笑顔で、ホタルはカズマにそう告げた。

そのホタルの笑顔からは、あの時のようなコウゾウへの憎悪の心は、微塵も感じられなかった。

(ホタルのこの笑顔を、これからもずっと守ってやらないとな・・・。俺はジャパネス王国軍の軍人として、力無き人々を守るという軍人としての本分を、今度こそ全うする・・・！！キサラギ少尉やホタルのような犠牲者を二度と出さない為にも・・・！！)

笑顔で子供たちとじゃれ合うホタルを見つめながら、カズマは改めてその決意を顕わにしたのだった。

そして同時刻。コーネリア共和国の高速道路において。

「そこのハイエース！！事故を起こすわよ！！いい加減止まりなさい！！」

フRezヴェルク・ダガーをストライダー形態に変形させたナナミが、緊急サイレンを流しながら高速道路を走行し、法定速度を大幅に超過したワゴン車を追いかける。

ワゴン車は必死に逃げるが、そもそも一般車両如きでは軍用機であるフRezヴェルク・ダガーに、最高速度、加速性能共に到底勝てるはずが無く、あっという間に追いつかれてしまった。

「くそが、本当にしつこい女だ！！おい、もっと飛ばせよ！！」

「やってるよ！！だけどこれ以上はスピードを出せねえ・・・うわあああああああああっ！！」

そこへ車の前に立ちはだかった、イクシオンを身に纏ったステイレット。

トリモチランチャーで正確に前輪にトリモチを発射し、あっという間に車は強制停止させられたのだった。

駆け付けたナナミがフRezヴェルク・ダガーをフレームアーム形態に変形させ、笑顔でステイレットとハイタッチをする。

「んだよ！！たかがスピード違反で、そんなに目くじら立てなくたっていいじゃねえかよ！！」

「貴方ねえ、一体どれだけの速度超過をしていたか分かってるの！？ちゃんと記録は残してあるわよ！！この法定速度は80km/hだけど、貴方たちは軽く120km/hは・・・」

「ナナミさん、ちょっと待って下さい。」

男たちに説教するナナミを、ステイレットが慌てて制止したのだが。

ステイレットがワゴン車の後部扉を開けると、そこにあったのは箱詰めされた大量のホタルだった。何でバレたんだ・・・！？男たちの表情から一気に血の気が引いてしまう。

「イクシオンが微かな生体反応を大量に感知したので、もしかしたらと思ったんですけど・・・。」

「ば・・・馬鹿な・・・！！」

「このコーネリア共和国において、ホタルは国に指定された天然記念物・・・それは分かっていますよね？それが何故こんなにも大量にあるんですか？」

「お、俺たちは何も知らねえ！！業者から荷物を運んでくれって頼まれただけなんだ！！まさかホタルだったとは思わなかったんだよ！！」

「エンゲージシステム、起動！！・・・やっぱり転売目的じゃないですか！！」

有無を言わずステイレットに心の中を覗かれ、あっさりと嘘だと見抜かれてしまったのだった。

「道路交通法違反と天然記念物保護法違反の現行犯、それと古物商取引法違反の容疑で、お2人を逮捕します！！」

「「そ、そんなあ～(泣)！！」」

ホタルで思い出したが、カズマとホタルは今頃どうしてるだろうか。

男2人に手錠を掛けるステイレットを見つめながら、ナナミはそんな事を考えてしまう。

(父さん・・・母さん・・・スバル・・・私はこれからも軍人として、この国の治安を守る為に戦い続けるわ。コーネリア共和国軍のフレームアームズ・ガールとして・・・だからこれからも天国で私の事を見守っていてね。)

改めて決意を顕わにするナナミを励ますかのように、太陽の光が優しくナナミを包み込んでいたのだった・・・。